

# 現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心

—日本人の国民性調査と国際比較調査から—

林文<sup>†</sup>

(受付 2009年11月30日; 改訂 2010年6月24日; 採択 6月25日)

## 要 旨

本稿では、まず、「日本人の国民性調査」の質問領域から、宗教に関する質問項目について、第1次(1953年)から第12次(2008年)調査で用いられてきた経緯と、それらの回答の時代変化をたどった。また、国際比較調査の結果とあわせることによって、信仰の有無と宗教的な心を大切と思うかを組み合わせる中で、日本における宗教についての考え方の特徴が見出されることを確認した。この組み合わせの視点に立って、宗教に関する「日本人の国民性調査」の他の質問項目について、回答の特徴を時代変化とともに概観した。特に「あの世はあると思うか」は若い年齢層のほうが「ある」と回答する割合が高く、若い世代で宗教的な心は大切だと思う考え方は大きく減少していても、何らかの宗教に関する気持ちを排除してはいないという示唆を得た。

また、数量化 III 類の分析を行い、信仰の有無と宗教的な心は大切と思うかを組み合わせる回答を、日本人の意識構造の全体の中に位置づけて把握した。さらに、宗教に関する質問の回答は年齢との関係が強いため、各質問項目の回答それぞれについて年齢の影響を除いた調整割合を計算して比較検討した。信仰があることは社会・生活上ポジティブな考え方の中にあり、宗教的な心は大切とする考え方もこれに大変近いこと、宗教的な心は大切でないとする考えは、社会に対してネガティブな考えと結び付いていることが示された。

以上の分析を通して、現代日本社会における信仰や宗教的な心の意味を考察した。

キーワード：信仰の有無、宗教的な心、意識構造、七か国国際比較調査、東アジア価値観調査、環太平洋価値観調査。

## 1. はじめに

「日本人の国民性調査」では宗教に関する質問項目が置かれており、これまで5冊の「日本人の国民性」の著書(統計数理研究所国民性調査委員会, 1961, 1970, 1975, 1982, 1992)で宗教は一つの節とされ、委員会メンバーによって執筆されている。本稿の目的は、こうした文献で述べられてきたことを、第12次(2008年)調査のデータを得て、国際比較データとの関連において確認的に分析し、その結果を提示することである。

まず、「日本人の国民性調査」の質問領域から、宗教に関する質問項目について、調査されてきた経緯と、それらの2008年までの回答の時代変化をたどった。つづいて、国際比較調査の結果とあわせることによって、信仰の有無と宗教的な心を大切と思うかどうかを組み合わせ

<sup>†</sup> 東洋英和女学院大学 人間科学部：〒226-0015 神奈川県横浜市緑区三保町 32

る中に日本における宗教についての考え方の特徴が見出されることを確認した。この組み合わせの視点を持って、「日本人の国民性調査」の宗教に関する他の質問項目について、回答の特徴を時代変化とともに概観した。また、数量化 III 類の分析を行い、信仰の有無や宗教的な心を大切と思うという考えを、日本人の意識構造の全体の中に位置づけて把握した。さらに、宗教に関する質問の回答は年齢との関係が強いため、ひとつひとつの質問項目について年齢の影響を除いた調整割合を計算して比較検討することを行った。以上の分析を通し、国際比較調査によって捉えられたことと考え合わせ、日本人の現代社会における信仰や宗教的な心の意味を考察した。

## 2. 宗教に関する質問の経緯

「日本人の国民性調査」における質問領域と質問項目は、たとえば、「統計数理研究所研究リポート」(中村 他, 2009)の「調査項目一覧表」に整理されている。この中で、宗教に関する領域は §3 であり、質問項目には項目番号 #3.xx がつけられている。まず、それらの質問項目について経緯をみておく。

宗教領域の質問項目として長く継続調査されてきたものに、#3.1 ‘宗教を信じるか’ と #3.2 ‘宗教心は大切か’ がある。これらは第 1 次(1953 年)調査にはなく、第 2 次(1958 年)から最新の第 12 次(2008 年)調査まで用いられた。宗教に関する質問項目に限らず、第 1 次と第 2 次調査で共通した質問項目は少なく、第 2 次調査では、その時点の方針で、第 1 次で調査されなかった質問が多く取りあげられている<sup>1)</sup>。他に長期に継続された質問項目としては、第 1 次から第 11 次(2003 年)調査までの #3.9 ‘首相の伊勢参り’ がある。第 12 次調査では取り上げられなかったが、現代では政治問題として気になる質問項目である。

以上の他には、#3.1b ‘宗派名’ (第 2 次から第 5 次調査まで)、#3.1c ‘(宗教)していること’ (第 3 次から第 5 次調査まで)、#3.3 ‘宗教は 1 つか’ と #3.4 ‘人々の宗教への態度’ (いずれも第 2 次調査のみ)、#3.5 ‘[あの世]を信じるか’ (第 2 次と第 12 次調査)、#3.6 ‘宗教か科学か’ (第 1 次と第 7 次調査)、#3.7 ‘性善・性悪’ (第 1 次と第 5 次調査)がある。また、#3.8 ‘自殺やむをえぬか(板ばさみ)’、#3.8b ‘自殺やむをえぬか(生活苦)’ (第 1 次調査のみ)がある。この #3.8、#3.8b は現代では社会問題として気になる質問項目であろう。

さて、#3.1 には ‘宗教を信じるか’ のニックネーム<sup>2)</sup>がつけられている。質問文は“宗教についておききしたいのですが、たとえば、あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか?”となっている。本稿では、宗教という言葉が既存の宗教宗派を示すものという印象を避け、そうした縛りのない「信仰」という言葉を使って、ニックネームとして、〈 〉で囲った〈信仰の有無〉を用いることとする。

‘宗教心は大切か’ のニックネームが付けられている質問項目には、実は #3.2 と #3.2b の 2 つがある。第 2 次から第 6 次(1978 年)調査までの #3.2 は、#3.1 〈信仰の有無〉で“もっている、信じている”と回答した人には尋ねず、“もっていない、信じていない”と回答した人だけに尋ねていた。これに対して、第 7 次(1983 年)調査以降の #3.2b は、#3.1 の回答に関わらず、すべての人に尋ねている。この変更は国際比較調査への拡がりという中での重要事項であると指摘できる。両者で質問文はまったく同じで、“それでは、いままでの宗教にはかわりなく、「宗教的な心」というものを、大切だと思いますか、それとも大切だとは思いませんか?”というものである。この項目のニックネームにある「宗教心」は、「宗教的な心」としたいところで、本稿では〈宗教的な心〉を用いることとする。

### 3. 信仰の有無と宗教的な心の推移

#### 3.1 信仰の有無

#3.1 〈信仰の有無〉の‘信仰あり’の回答割合を調査年・年齢層ごとに示したのが表1である。‘信仰あり’の全体としての割合(表1の「全体」列)は、第5次(1973年)調査までは減少の様子であったが、第6次(1978年)には第2次(1958年)調査と同程度にまで増加し、その後減少傾向にありながら上下している。1990年代までは、日本で信仰を持つ成人はほぼ30%強で変化がないと述べられてきた(林・林, 1995, など)。また、信仰を持つ人が若い層よりも高年齢層に多いことは、戦後の日本社会では常識的に受け入れられているところでもある。各調査年内で年齢層別の比較をすると、確かにどの調査年でも、年齢の高い方が‘信仰あり’の割合が高い。同じ年齢層別を調査にわたって比較すると、第2次(1958年)から第12次(2008年)調査まで、20歳代はほぼ10%台、30歳代は16%と30%の間を上下しているが、40歳代より上の年齢層では‘信仰あり’の割合が減少していることがわかる。

年齢が高い層の‘信仰あり’の割合が減少しているにも関わらず、全体での割合で見ると余り減少していないのは年齢分布の変化による。仮に、過去の調査においても第12次(2008年)調査と同じ年齢分布であったとして、‘信仰あり’の年齢調整割合をもとめてみたところ、第2次(1958年)調査では47%、第3次(1963年)では40%、順次、第11次(2003年)調査まで、41%、34%、42%、38%、36%、37%、30%、31%となり、第12次(2008年)調査の27%へと、明らかに減少している<sup>3)</sup>。しかし、時代を越えた年齢分布による調整(年齢調整割合)は、当然ながら全く現実的ではない。社会状況としては、それぞれの時代の年齢分布そのものも含めた社会状況であることはいままでもないことであり、回収率による偏りがないものとしてみれば、ほぼ30%強で変化がなかったという見方はそのとおりである。

生まれ年を同じくする層がたどった加齢による変化を、表1に矢印で例示した。年齢層別の‘信仰あり’の割合の変化について、時代・年齢・コウホート要因のどれが効いているのか、コウホート分析したのが図1である(中村隆による。コウホート分析については中村, 2005を参照)。コウホート分析は性別に行ったが、男女でほぼ同様に、加齢による効果が最も大きい。生まれ年による効果は、第二次世界大戦時に青年期に達していた人々と、戦後生まれの人々の間の違いが読み取れる。時代効果では第5次(1973年)と第6次(1978年)調査の差が大きい、こ

表1. #3.1 〈信仰の有無：信仰あり〉の回答割合の推移(%, 年齢層別)。

	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	全体	2008年の 年齢分布 による調整
第2次(1958年)	14	30	41	51	66	63	35	47
第3次(1963年)	13	20	40	43	54	58	31	40
第4次(1968年)	13	21	32	48	56	63	30	41
第5次(1973年)	10	16	27	35	47	59	25	34
第6次(1978年)	19	23	36	44	55	69	34	42
第7次(1983年)	15	21	31	40	56	55	32	38
第8次(1988年)	15	19	28	43	48	54	31	36
第9次(1993年)	19	29	27	34	48	59	33	37
第10次(1998年)	12	17	25	29	43	49	29	30
第11次(2003年)	7	23	23	31	40	51	30	31
第12次(2008年)	13	18	23	27	36	41	27	27

注) 年齢別の値をみていくと、かなり増減があるようにみえる。例えば第11次と第12次の20歳代は7%と13%で、6ポイントの差がある。回収サンプル数はそれぞれ121人、186人であり、仮に単純無作為抽出の標本誤差を計算すると、95%信頼幅が±4.9%、±4.7%である。

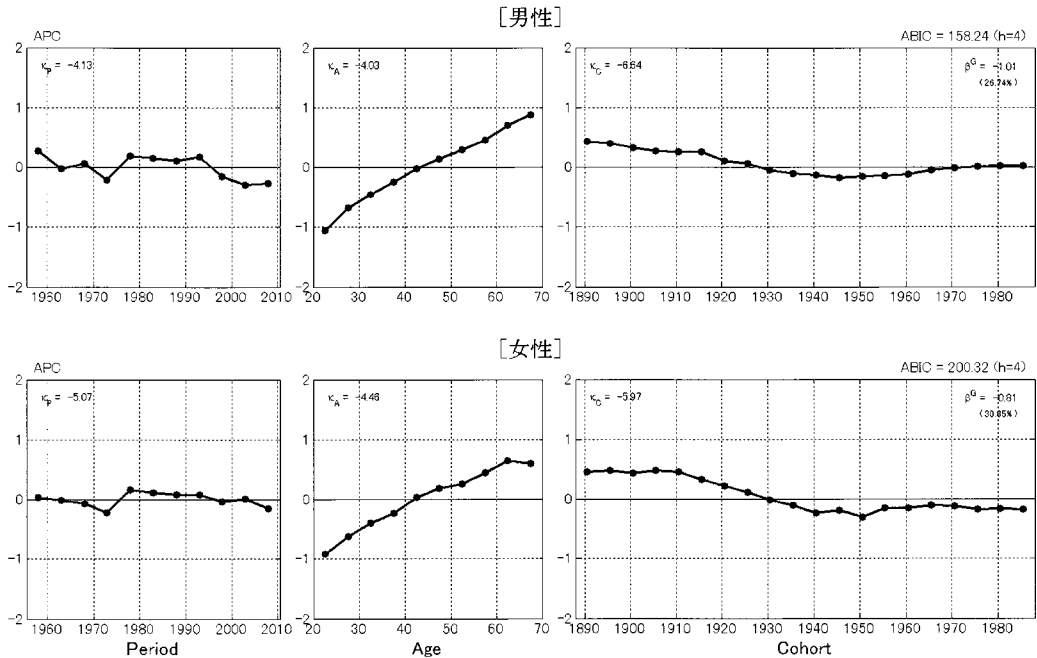


図1. #3.1 〈信仰の有無: '信仰あり'〉のコホート分析結果(性別).

の点については以下にあらためて考察したい。性別でこうした効果の差はあまりないが、'信仰あり'の割合自体は性別で少し差があり、第2次(1958年)から第12次(2008年)調査まで、女性の方が男性より高い傾向がみられる。

さて、第5次(1973年)調査は、どの年齢層でも'信仰あり'の割合が低い、これと同様の傾向は、宗教に関する問題以外の他の質問の回答にもみられている。すなわち、第5次で第4次(1968年)調査までと大きく割合が変わった回答として、#2.5 '自然と人間との関係'における'自然に従え'の増加と'自然を征服'の減少が注目される。そのほか、#4.5 '子供に金は大切と教える'における'反対'の増加、#7.1 '人間らしさはへるか'における'賛成(人間らしさはへる)'の増加、#7.2 '心の豊かさはへらないか'における'賛成(へらない)'の減少などがあり、いわば伝統的価値観の減少といえるような変化があった。これについて林(1979)は、第6次(1978年)調査では伝統回帰の傾向が読み取れているものの、同じ状態に戻る単なる回帰ではなく、例えば近代伝統の考え方の筋道など構造の変化があると分析している。その分析の示唆するとおり、その後の変化は一定ではない。'自然と人間との関係'については、第5次調査をきっかけに増減の方向が変わり、現在までその方向の変化が続いている。'信仰あり'の変化は、こうした意識変化とともに現れた現象ということができよう。

### 3.2 宗教的な心

#3.2 〈宗教的な心〉は、2節で述べたように第2次(1958年)から第6次(1978年)調査までは、#3.1 〈信仰の有無〉の'信仰なし'の回答者に対して質問され、第2次では70%が'大切'、17%が'大切でない'という回答であった。その後、第3次から第6次調査まで、'大切'の割合は77%、76%、69%、74%と増減はあるが概ね同水準である。

第7次(1978年)調査からの#3.2b〈宗教的な心〉は#3.1〈信仰の有無〉の回答によらず質問されるように変わった。#3.2と#3.2bを全期間を通して比較するため、まず、#3.1〈信仰の有無〉の‘信仰なし’の回答者の中での#3.2b〈宗教的な心〉の‘大切’の割合を、#3.2の‘大切’の割合につなげてみる。その年齢別の割合を示したのが図2である。第8次(1988年)調査以降は減少傾向が明らかになっているのがみえる。もう一つの全期間を通しての比較の視点として、宗教に対する肯定的な考えを「信仰を持っているか、持っていないくても宗教的な心は大切と思う」と捉えることとし、第6次調査までは#3.1の‘信仰あり’と#3.2‘大切’を足した割合、第7次調査以降は、#3.1の‘信仰あり’と、#3.1で‘信仰なし’かつ#3.2bで‘大切’を合計した割合をもとめた。この〈宗教に肯定的な考え〉の割合の年齢層別推移を図3に

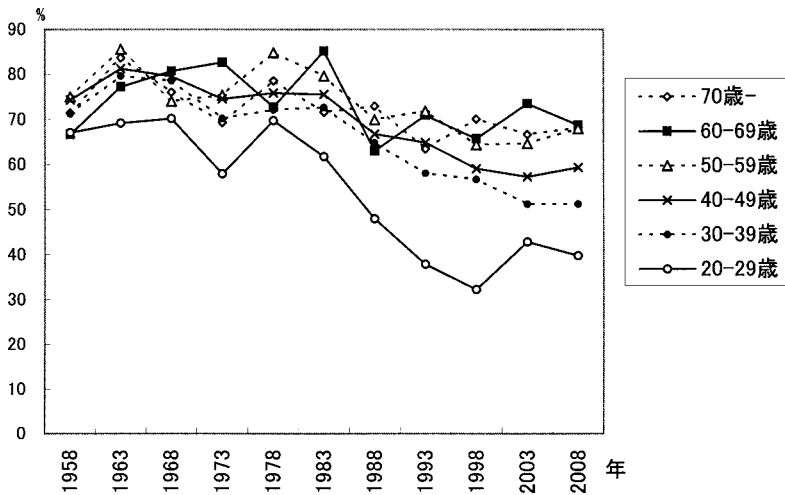


図2. #3.1〈信仰の有無：信仰なし〉の中での#3.2(#3.2b)〈宗教的な心：大切〉の推移(%，年齢層別)。

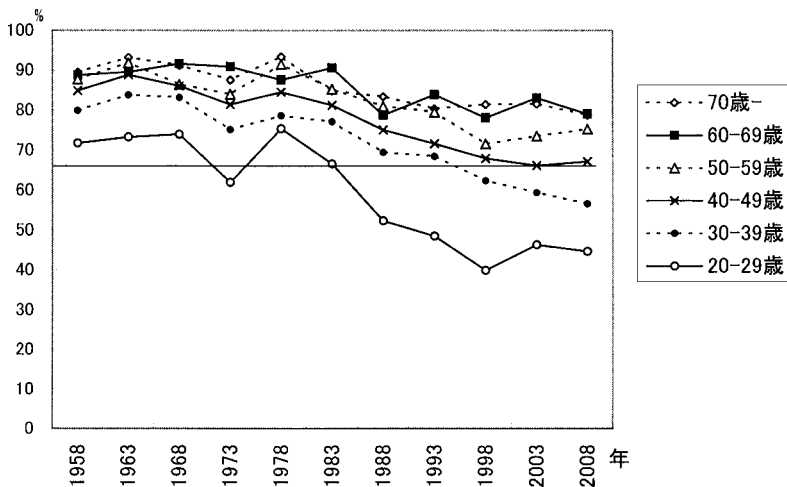


図3. #3.1&#3.2(#3.2b)〈宗教に肯定的な考え〉の割合の推移(%，年齢層別)。

示した。図の67%の位置の水平線は、大多数意見(性別・年齢層別にみても3分の2以上が選択する意見)を示すものとして引いてある。第8次(1988年)調査までは、日本人の大多数意見の一つといえた(林・林, 1995, ほか)ことがわかる。

#3.2 (#3.2b)〈宗教的な心〉の質問は、日本は信仰を持つ割合は低い、信仰を持たなくても宗教的な心は大切と思っており、「信仰を持たない」ことの意味が西欧とは異なることを捉えた質問として大きな意義があったといえる(林, 2006)。1970年代から「日本人の国民性調査」研究は国際比較調査研究に発展していくが、「宗教的な心」をどう翻訳するかという問題が起これ(この点については4節であらためて触れる)、ますます「宗教的な心」という考え方が日本独自のものである可能性がみられた。

とはいえ、大多数意見と言えたのは20歳代を特別に除外するとして、第9次(1993年)調査あたりまでで、その後減少傾向が明らかになってきていた。ただし、近年は減少傾向が止まったようにも見える。年齢層別の傾向では、30歳代は減少傾向が続いているが、これは、1990年代のオウム真理教による事件をはじめ、カルト的宗教団体による事件がつづいた状況を若い年齢で受けた世代として、宗教に対する拒否的な意識を残していると考えられることもできる。

#### 4. 信仰の有無と宗教的な心の国際比較

信仰の有無と宗教的な心についての質問項目は、以下の国際比較調査でも用いられている。1987年から1993年の「国民性七か国比較調査」(林 他, 1991; 鈴木 他, 1995; 統計数理研究所国民性国際調査委員会, 1998) (以下、「七か国調査」と略記する)、2002年から2005年の「東アジア価値観調査」(吉野, 2004a, 2004b, 2005a, 2005b, 2005c, 2005d, 2006a, 2007a)、2005年から2009年の「環太平洋価値観調査」(吉野, 2006b, 2007b, 2007c, 2008, 2009; 吉野・巖岩, 2007; 吉野・松本, 2008)である。「日本人の国民性調査」の#3.1と#3.2bの質問項目であるが、国際比較調査ではまったくの同一質問項目とはいえない点があるので、以下この節では#番号を省いて〈信仰の有無〉と〈宗教的な心〉を用いることにする。

各国・地域の〈信仰の有無〉×〈宗教的な心〉の回答組み合わせの割合を挙げたのが表2である<sup>4)</sup>。同じ国・地域で複数回の調査結果がある場合はそれらを合せて、「信仰あり」の割合が高い順に並べた。日本は、これらの国際比較調査と同じ時期の「日本人の国民性調査」も含む。日本でも調査によってかなりの差がみられ、「信仰あり」の割合が最も低いのは2002年の「東アジア価値観調査」での24%、最も高いのは1988年の「七か国調査」での37%である。1988年の第8次調査では31%で、「七か国調査」の結果はそれまでの「日本人の国民性調査」における割合を上回っている。日本における質問文は全く同じであるため、調査の方法や調査票の構成、質問の順序などによる差とも考えられるが、何がどのように影響したかを説明することはできていない。日本以外の国・地域の結果も、調査時が早いほど高い割合とは限らず、複数調査における割合の差は、標本誤差や実施状況などの非標本誤差を含む調査誤差と考えておいた方がよいと思われる。

国際比較として考えると、まず、「信仰あり」の割合が高いのはインド、イタリア、アメリカ、シンガポール、旧西ドイツが7割以上、台湾が7割前後、次いで、イギリス、フランス、オランダが6割台、韓国が5割程度、香港が3割台で日本が3割前後、そして、中国本土の各地域が1~2割台となっている。中国については、宗教を否定する政治的な指導の影響を示すものと考えられる。最近の世界の信仰の状況については、2005年、2006年に実施された「世界価値観調査(World Value Survey)」がある。質問文も異なるが、報告書(電通総研・日本リサーチセンター, 2008)から、「現在何か宗教をお持ちですか」で宗教名等を挙げた割合を「信仰あり」としてみると、日本は37%、韓国71%、香港28%、イタリア88%、アメリカは72%、ド

イツ 57%, フランス 50%, イギリス 50%, オランダ 51%となっている。欧米については、15年以上前の「七か国調査」よりも10%低い値であるが、「信仰あり」の減少を示すのかは明らかでない。

〈宗教的な心〉との関係に注目すると、日本以外では、信仰を持っていても宗教的な心は大切にないとする人々があることがわかる。「日本人の国民性調査」では、前にも述べたように第6次(1978年)調査まで、「信仰あり」の回答者には〈宗教的な心〉の質問をしていなかったが、それは宗教的な心があってこそ信仰があるという考えに基づく質問構成である。第7次(1983年)調査以降、国際比較の観点から、「信仰あり」の回答者に対しても尋ねることとなった結果、最初の質問構成における考えが、日本ではそのとおりであることが実証され、日本の特徴ともいえることが示された。信仰を持っていても「宗教的な心大切にない」とする回答が最も多いのはインドであり、その他はヨーロッパの旧西ドイツ、イギリス、オランダ、フランスが1割以上である。ヨーロッパでは信仰と宗教的な心の意味が日本とは異なることが示唆される。

「信仰なし」回答者中の「宗教的な心大切にない」の回答の割合が日本の次に高いのは、インド、台湾、韓国、香港で5割程度以上である。アメリカは2つの調査でかなり異なるが、これを除けば、いずれも東アジアの国である。信仰がなければ宗教的な心もないというのが西欧であって、東アジアでは宗教的な心があってこそ信仰がある、という特徴として捉えることができよう。また、その中でも、こうした捉え方の上では、日本は韓国と最も似た傾向を示すといえる。

このように〈信仰の有無〉と〈宗教的な心〉との関係が、日本あるいは東アジアとヨーロッパで異なることが示唆されたが、「信仰を持っている」か、持っていないでも「宗教的な心は大切に思う」の合計割合を、宗教に対する肯定的な考えとして捉えることとし、表2の「信仰あり」+「大切にない」の列に斜体で示した。中国本土4地域を除き、どこも7割程度以上であることが読み取れる。国民性調査の時系列比較において述べたように、それぞれの国・地域も年齢分布が異なるが、これは年齢分布の違いも含めた実態状況を示すものであることはいままでもない。

ここで注意したいのは、国際比較にあたって「宗教的な心」の翻訳の問題である。「七か国調査」の際のアメリカ、イギリスでは「religious attitude」が用いられ、「環太平洋価値観調査」のシンガポール、オーストラリア版では、「religious mind」が用いられた。その論議もあるが、日本において「信仰あり」の割合は低くても、「宗教的な心大切にない」という考えで宗教を否定しない立場を示していることは認められる。

## 5. 宗教領域の項目について

「日本人の国民性調査」にもどり、宗教の領域に分類されている質問項目#3.5「あの世」を信じるか、#3.6「宗教か科学か」、#3.9「首相の伊勢参り」について、#3.1〈信仰の有無〉と#3.2b〈宗教的な心〉の回答組み合わせとの関連をみていくこととする。この組み合わせの項目のニックネームを〈信仰の有無×宗教的な心〉とし、回答組み合わせの群を「信仰あり」群、「信仰なし・心大切にない」群、「信仰なし・心大切にない」群、「信仰なし・その他」群とする。ここで「その他」は無回答も含む。この4群別の回答割合を、年齢15歳区分の4層別の回答割合とともにみていく。

### 5.1 「あの世」を信じるか

#3.5「あの世」を信じるか(“あなたは「あの世」というものを、信じていますか?”)は、第2次(1958年)と第12次(2008年)調査で用いられている。1958年には「あの世」を「信じる」20%、「信じてはいない」59%であったのに対して、2008年には「信じる」38%、「信じてはいない」33%となっている。中間の「どちらともきめかねる」は12%と23%で、「信じては

表 2. 〈信仰の有無〉と〈宗教的な心〉の回答組み合わせの国際比較(%)。

	信仰あり			信仰あり 合計	信仰あり +	信仰なし			
	宗教的な心	大切	大切でない			大切	(*)	大切でない	その他
India(AP) 2008	74	17	1	93	97	4	(57)	3	0
ITALY(7N) 1992	81	5	2	88	93	5	(44)	5	2
USA(7N) 1988	80	5	1	86	94	8	(56)	6	1
USA(AP) 2006	69	8	2	79	86	7	(34)	11	2
Singapore(EA) 2004	69	6	4	79	86	6	(31)	11	4
Singapore(AP) 2007	67	8	3	79	86	7	(33)	12	2
FRG(7N) 1987	56	17	5	77	81	3	(14)	17	2
Taiwan(EA) 2003	62	8	4	75	87	12	(47)	11	3
Taiwan(AP) 2006	58	5	1	65	85	20	(58)	12	2
UK(7N) 1987	48	14	3	65	76	11	(30)	22	2
FRNCE(7N) 1988	52	11	2	65	76	11	(31)	22	2
NL(7N) 1993	41	14	5	60	69	9	(22)	26	5
South Korea(AP) 2006	51	1	1	54	81	27	(58)	13	6
South Korea(EA) 2003	47	2	1	50	78	27	(55)	16	6
Hong Kong(AP) 2006	31	5	2	38	71	32	(53)	22	8
Hong Kong(EA) 2002	29	3	2	34	65	31	(48)	28	6
JPN(7N) 1988	35	1	1	37	77	41	(65)	10	12
JPN(KS) 1988	29	1	2	31	74	43	(63)	14	11
Japan(AP) 2004	27	1	1	28	73	45	(63)	15	12
JPN(KS) 2008	25	1	1	27	71	44	(60)	18	12
Japan(EA) 2002	23	1	1	24	68	44	(58)	16	16
Shanghai(AP) 2006	17	5	5	28	43	16	(22)	35	22
Shanghai(EA) 2002	15	3	1	19	47	28	(34)	38	15
Hangzhou(HK) 2002	15	3	3	20	40	20	(25)	36	25
Kuming(HK) 2002	13	4	2	20	41	21	(27)	38	21
Beijing(AP) 2006	9	3	1	14	44	30	(35)	47	9
Beijing(EA) 2002	7	1	1	9	37	28	(30)	58	6

注) 7N: 七ヶ国国際比較調査, EA: 東アジア価値観調査, AP: 環太平洋価値観調査, KS: 日本人の国民性調査  
HK: 杭州・昆明調査(鄭: 2005)  
(\*)は、「信仰なし」の中の「宗教的な心大切」の率

いない」と明言しないという意味では「信じる」の増加と同傾向ということもできるだろう。

さて、#3.1 〈信仰の有無〉の「信仰あり」が減少傾向であるのに関わらず、「あの世」を「信じる」が増加していることについて、〈信仰の有無 × 宗教的な心〉の群別と年齢層別の回答に注目する(表 3)。「信仰あり」群で「あの世」を「信じる」割合が高いのは共通であるが、第 2 次(1958 年)調査では「信じる」は年齢の高い層、「信じてはいない」は若い年齢層であったのに対して、第 12 次(2008 年)調査では、若い層の方が「あの世」を「信じる」割合が高い。この傾向は男性でも女性でも同様である。第 2 次(1958 年)調査で 20-34 歳の層は第 12 次(2008 年)調査では 70 歳以上になっているが、13%から 36%(表 3 の 65 歳以上は 32%)に増加しており、全体が「信じる」ように変化したといえる。「信じる」の割合は、性別にみると第 2 次(1958 年)でも第 12 次(2008 年)調査でも、女性の方が高い。また、第 2 次 1958 年調査で「あの世」を「信じる」割合が高いのは特に女性の 50 歳以上である。50 歳代は 1945 年の第二次世界大戦を 30 歳代で過ごしており、それ以上の年齢の女性が、こうした心情的な問題について、新時代の価値観に迎合しにくかったといえそうである。この質問項目は第 2 次調査で取り上げられて、調査結果が予想通りであったため、それ以降取り上げられていなかったと思われる。

#3.5 「あの世」を信じるか」の質問に近いものとして、1973 年から 5 年ごとに行われている NHK 放送文化研究所の「日本人の意識」(全国 16 歳以上、面接聴取法)で「あなたが信じて



表 3. #3.5 「あの世」を信じるかの〈信仰の有無×宗教的な心〉別、年齢層別(%)。

	信じる (男, 女)	きめかねる	信じてない	その他・D.K.	計
第2次調査(1958年)	20	12	59	9	100
信仰あり	34	12	45	10	100
信仰なし・宗教的な心大切	15	12	66	7	100
信仰なし・心大切でない	4	14	77	5	100
信仰なし・その他	10	16	53	21	100
20歳～34歳	13 (13, 13)	13	66	7	100
35歳～49歳	19 (17, 20)	11	62	8	100
50歳～64歳	33 (23, 42)	10	48	10	100
65歳以上	35 (23, 42)	16	29	20	100
計	20 (17, 23)	12	59	9	100
第12次調査(2008年)	38	23	33	7	100
信仰あり	48	23	22	7	100
信仰なし・宗教的な心大切	39	23	33	5	100
信仰なし・心大切でない	31	18	48	4	100
信仰なし・その他	24	28	33	15	100
20歳～34歳	46 (39, 52)	20	30	4	100
35歳～49歳	41 (36, 45)	23	29	7	100
50歳～64歳	36 (30, 42)	22	37	5	100
65歳以上	32 (25, 38)	25	33	9	100
計	38 (32, 44)	23	33	7	100

いるもの」を用意した項目から選んでもらう形で質問され、その項目の一つに「あの世・来世」が取り上げられている(NHK 放送文化研究所, 2010)。それによると、1970年代の10%弱から少し増加して2003年までは10%強で推移し2008年には15%となっている。別の調査結果として、1976年から1978年に東京と米沢で行われた宗教に関する内容を含む「日常生活習慣に関する調査」では、同様の質問で、「あの世・死後の世界」が選択された割合は東京・米沢ともに10%未満であった(林 編, 1979)が、この調査の後継版として行った2004年の米沢郵送調査では神や仏を信じるという回答はほぼ同じ割合であるのに対して、「あの世・死後の世界」は増加がみられ、年齢が若いほうが選択する割合が高かった(林, 2006)。回収率が低い郵送調査による特徴ではないかと考えていたが、NHKの「日本人の意識」調査によれば、郵送調査だけではない傾向として読み取れる。なお、このNHK調査では「信仰」を尋ねていない。

「東アジア価値観調査」(2002年-2005年)、「環太平洋価値観調査」(2005年-2009年)では、「神や仏」「死後の世界」「魂(たましい)」をあげ、それぞれ「あると思うか」を尋ねている。「死後の世界」については「あると思う」18%、「あるかもしれない」45%、「ない」26%である。回答選択肢に「あるかもしれない」があるところは違うが、年齢層別の傾向は「日本人の国民性調査」の第12次(2008年)調査における傾向と同様である<sup>5)</sup>。

## 5.2 ‘宗教か科学か’

#3.6 ‘宗教か科学か’は第1次(1953年)調査、第7次(1983年)調査(K型調査票)、第12次(2008年)調査(M型調査票)で用いられている。「宗教というものは、人間を救うことはできない。人間を救うことができるのは科学の進歩以外にはない」という‘宗教否定’の考えはほぼ1割程度で変わりなく、「人間の救いには科学の進歩と宗教の力とが、たすけあってゆくことが必要である」(‘宗教と科学の協力’)、「科学の進歩と人間の救いとは関係がない。人間を救うことができるのはただ宗教の力だけである」(‘宗教のみ’)の考えが減って、「科学が進歩しても、宗教の力でも、人間は救われるものではない」(‘両方否定’)が増えている。特に、科学と宗教の両方を否定する回答は第1次では8%であったが、第7次調査で27%に増加しているのは大きな変化である。この間には公害問題が表面化して、#2.5 ‘自然と人間の関係’の質問でも、

表 4. #3.6 ‘宗教か科学か’ と〈信仰の有無 × 宗教的な心〉の関連 (%) .

第7次調査(1983年)	科学のみ	宗教科学 協力	宗教のみ	両方否定	その他・DK	計 (%)	(実数)
信仰あり	4	67	9	13	7	100	722
信仰なし・宗教的な心大切	6	56	3	29	6	100	1117
信仰なし・心大切でない	18	23	1	48	11	100	235
信仰なし・その他	13	30	2	38	17	100	182
合計	7	54	4	27	8	100	2256

それまで増えていた‘自然を征服’の考えが第5次(1973年)調査で‘自然に従え’と逆転して、その後、科学技術による発展に対する疑問の考え方へと転換した。その流れの一つと考えられる。

#3.6 ‘宗教か科学か’ と〈信仰の有無 × 宗教的な心〉との関係は、同一調査で取り上げられた第7次(1983年)調査でのみ見ることが出来る。表4に示すとおり、‘科学のみ’の回答は‘信仰なし・心大切でない’群での割合が18%で最も多く、‘宗教のみ’の回答は‘信仰あり’群で9%であるほかは6%以下である。宗教から最も遠い‘信仰なし・心大切でない’群で‘科学のみ’が最も多く、‘信仰あり’群で‘宗教のみ’が最も多いのは推察のとおりであるが、この程度でしかない。‘宗教と科学の協力’の回答は‘信仰あり’群と‘信仰なし・心大切’群では6割台、5割台であるのに対して、‘信仰なし・心大切でない’群では2割台で、大きな差がみられる。‘両方否定’の回答も‘信仰あり’群と‘信仰なし・心大切’群で3割以下、‘信仰なし・心大切でない’群では5割程度で、‘信仰なし・心大切’群は、‘信仰なし・心大切でない’群よりも、‘信仰あり’に近い。こうした傾向は、第7次だけではないと思われる。#3.1〈信仰の有無〉より#3.2b〈宗教的な心〉のほうが、#3.6 ‘宗教か科学か’ と関連しているようである。

### 5.3 ‘首相の伊勢参り’

#3.9 ‘首相の伊勢参り’は、第12次(2008年)調査では用いられなかったが、第1次(1953年)から第11次(2003年)調査まで続けられた質問である。第1次(1953年)から第6次(1978年)調査までに大きく変化しており、第6次以降の変化は少ない。第6次調査までの変化は、5段階の回答選択肢の両端‘行かねばならぬ’と‘行くべきではない’が共に5%前後でほとんど変わらないが、‘行った方がよい’は50%から17%に減少、中間の‘本人の自由’が23%から51%に増加している。ほぼ一方的に‘本人の自由だ’の増加の傾向であるが、そこから外れる第4次(1968年)調査は、‘行かない方がよい’が最も多く、第5次(1973年)調査では‘本人の自由だ’が大幅に増加している。

〈信仰の有無 × 宗教的な心〉との関連、年齢との関連を、第3次(1964年)、第6次(1978年)、第9次(1993年)調査でみると、いずれも、‘信仰あり’群、‘信仰なし・心大切’群、年齢の高い層に“行った方がよい”が多い傾向は同じである。第3次調査の年齢層別の回答傾向がそのまま第6次、第9次調査へと移行している傾向も読み取れる。

## 6. 日本人の意識構造の中の信仰の有無と宗教的な心

人々の生活の中で信仰の有無や宗教的な心がどのような意味を持っているのかを、最新の第12次(2008年)調査のほぼ全ての質問項目の総合的分析として数量化 III 類を適用し、得られた意識構造の中に位置づけることによって探った。2次元布置の図は項目が多く煩雑になるので、人間関係に関する項目群とそれ以外の項目群に分けて2つの図(図4a, b)とした。〈信仰の有無

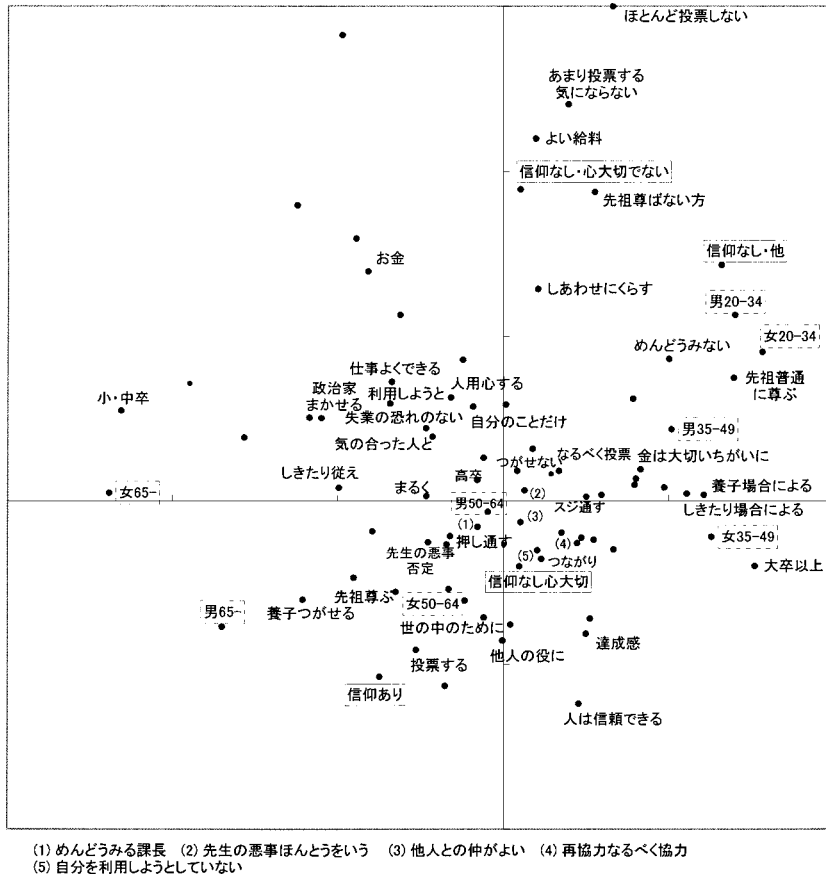
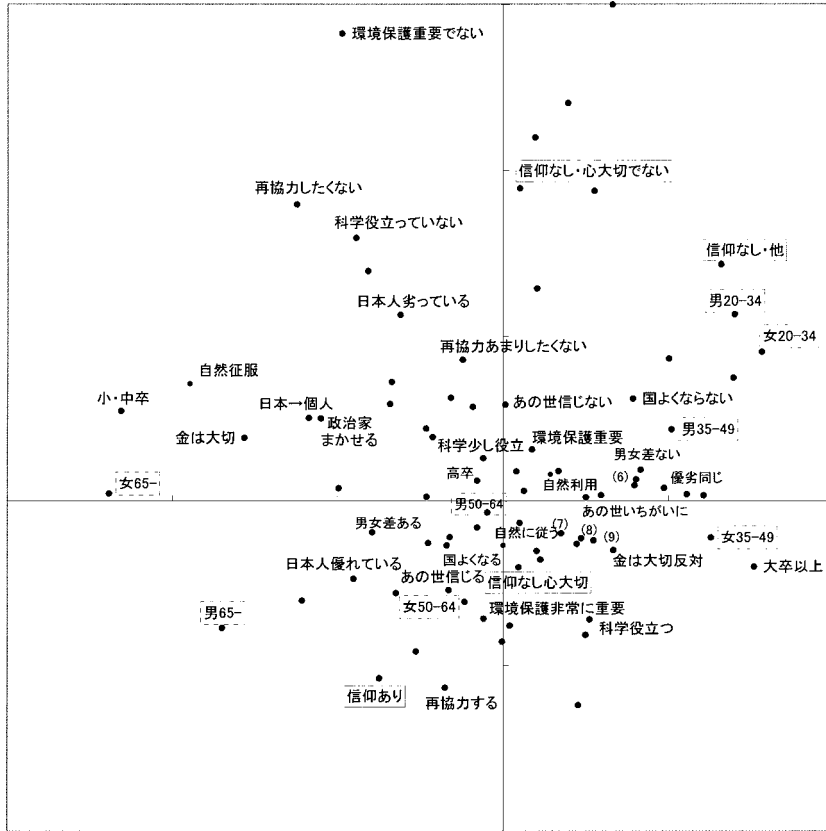


図 4a. 第 12 次 (2008 年) 調査にみる日本人の意識構造 (数量化 III 類による) — その 1.

× 宗教的な心〉の各群別と性別 × 年齢層別は両図に含めた。図では、用いた質問項目名を省き、回答選択肢を略した言葉で表し、意識構造の概略を読み取れるようにした。第 1 次元 (横軸) では伝統的考え方で中間的考え方が分けられており、近代的考え方は中間にある。第 2 次元 (縦軸) では社会に対するポジティブな考え方でネガティブな考え方が分けられていることが読み取れる。その中で、〈信仰の有無 × 宗教的な心〉の各群別の位置をみると、「信仰あり」は伝統的考え方で社会的にポジティブな考え方で強く結び付いている。それと同様に、「信仰なし・心大切」もポジティブな考え方の中であるが、近代的考え方といえることができる。一方、「信仰なし・心大切でない」「信仰なし・その他」は、社会に対してネガティブな考え方で結び付いている。性別 × 年齢層別の位置は、65 歳以上が伝統的考え方の領域にあり、34 歳までの年齢層は、社会的にネガティブあるいは中間の考え方と結び付いている。また、64 歳までは、男性は女性よりも社会に対してネガティブな考え方との結びつきが強いが、65 歳以上では、逆に、男性は女性よりもポジティブな考え方に近い傾向がある。

こうした意識構造は、分析に取り上げた質問項目によって解釈が様々になり得るが、ここでは、第 12 次 (2008 年) 調査 (K 型調査票) のほぼ全質問の中での構造として捉えた。取り上げなかった質問は、#7.1 「人間らしさはへるか」、#7.2 「心の豊かさはへらないか」、#5.1 「恩人キ



(6) 国の優劣ひとくちではいえない (7) 政治家にまかせる (8) 日本=個人 (9) 個人=日本

図 4b. 第 12 次 (2008 年) 調査にみる日本人の意識構造 (数量化 III 類による) — その 2.

トク' × #5.1b '親キトク', #5.1c1 '入社試験(親戚)' × #5.1c2 '入社試験(恩人の子)', #5.1d '大切な道徳' の回答組み合わせで、これらを除いたのは、これらを含めた数量化 III 類分析による布置では中心部に集まり特徴がみられない傾向があったためである。例えば、#7.1, #7.2 は中間回答のある質問であるが、人間らしさ・心の豊かさが 'へる' という考え方と 'へらない' という考え方が両方とも中心部に集まり、中間回答は 1 次元目のプラスの位置にあって、他の中間回答と同様の位置にある。その他の質問項目回答による構造は、これらを除いた場合とほとんど違ってない。

## 7. 信仰の有無と宗教的な心と生活・社会意識との関連

前節では総合的分析で得られた意識構造の中に〈信仰の有無 × 宗教的な心〉の各群がどのような位置にあるかを見たが、日本における宗教の意味を探っていくために、信仰や宗教的な心が日常生活・社会意識にどのように関連しているのか、〈信仰の有無 × 宗教的な心〉の組み合わせ 4 群と、その他の様々な質問回答との関連をみていくこととする。表 5 は、主たる選択肢の回答で〈信仰の有無 × 宗教的な心〉各群における回答割合に差がみられた質問回答である。この差については次のように考えた。

宗教に関する意識は年齢との関係が非常に強く、項目間の関連が年齢の影響を通しての関連であるものも多いため、年齢分布の違いの影響を除いた差を求めた。すなわち、〈信仰の有無 × 宗教的な心〉の4群ごとの各質問回答結果から、年齢層別回答を基にして4群それぞれの年齢分布に合わせるようにウェイト調整した年齢調整割合を計算し、それと実際の〈信仰の有無 × 宗教的な心〉4群の回答割合との差を求めた。差の指標としては、標本誤差の考えを利用し、

$$\frac{p_{ij} - q_{ij}}{\sqrt{q_{ij}(1 - q_{ij})/n_j}}$$

を用い、この値が2以上のものを差があると評価することとした。ここで、 $p_{ij}$  はある質問の第*i*選択肢の〈信仰の有無 × 宗教的な心〉第*j*群における回答割合、 $q_{ij}$  は第*i*選択肢の年齢層別回答割合を〈信仰の有無 × 宗教的な心〉第*i*群における年齢分布を用いた年齢調整割合<sup>6)</sup>、 $n_j$  は第*j*群の回答者実数である。厳密な検定の基準としてではなく、無視できない程度の差の目安として扱うこととした。

表5に、主たる選択肢で〈信仰の有無 × 宗教的な心〉各群の回答割合に差がみられた質問項目について、上で述べた差の指標を整理した。差の目安として、評価値が2.0以上の場合に‘+’、評価値が3.0以上の場合に‘++’をつけた。‘信仰なし・その他’群は中間回答が多い傾向があるが、この群だけに差がみられた質問項目は、特徴を見出すにはあまり意味がないと考え、この表に入れていない。

‘信仰あり’群に多い回答は、#4.11 ‘先祖を尊ぶか：尊ぶ方’、#3.5 ‘あの世’を信じるか：信じる’、#8.7j ‘支持政党：公明党’、次いで#4.10 ‘他人の子供を養子にするか：つがせた方がよい’、#2.7 ‘一番大切なもの：家・先祖’<sup>7)</sup>、#2.12c ‘人は信頼できるか：信頼できると思う’、#2.4 ‘くらし方：社会のために全てを捧げてくらす’、#2.5 ‘自然と人間との関係：自然に従え’、#2.10 ‘幸福かためになることか：世の中のために’、#5.22 ‘金か人間のつながりか：人間どうしのつながり’、#7.24 ‘就職の第1の条件：やりとげたという感じ’であり、信仰と直接結びつくもののほか、いわば道徳的な回答が多いということが出来る。

‘信仰なし・心大切’群の特徴は#8.7j ‘支持政党：なし’、#1.3 ‘学歴：大学卒’、#9.1 ‘日本人の性格：勤勉’、#2.5 ‘自然と人間との関係：自然を利用’、#5.1 ‘恩人がキトクするとき：会議に出る’、#5.1b ‘親がキトクするとき：会議に出る’、#9.6 ‘日本人・西洋人の優劣：すぐれている’、#2.12c ‘人は信頼できるか：信頼できると思う’、#2.7 ‘一番大切なもの：家族’、#4.5 ‘子供に「金は大切」と教える：反対’、#4.10 ‘他人の子供を養子にするか：つがせない’であり、比較的中間的現状肯定的な意識ということが出来る。

これに対して‘信仰なし・心大切でない’群の特徴は、#2.1 ‘しきたりに従うか：従え’、#4.5 ‘子供に「金は大切」と教える：賛成’、#2.7 ‘一番大切なもの：金・財産’、#4.11 ‘先祖を尊ぶか：尊ばない方’、#2.12 ‘他人のためか自分のためか：自分のことだけ’、#2.12c ‘人は信頼できるか：用心する’、#3.5 ‘あの世’を信じるか：信じない’、#2.5 ‘自然と人間との関係：自然を征服’、#4.16 ‘子供の将来の性質：人前で意見を言う力’、#5.22 ‘金か人間のつながりか：金’、#2.10 ‘幸福かためになることか：自分がしあわせにくらす’、#5.6 ‘めんどうをみる課長：めんどうをみない’、#7.36 ‘科学上の発見・利用は生活に役立つか：役立っていない’、#7.35 ‘環境の保護は重要か：あまり重要でない’、#5.1d ‘大切な道徳：権利&自由’、#5.1c1×c2 ‘入社試験：親戚&恩人’、#1.3 ‘学歴：中学’ ‘学歴：高校’で、身近な家族を含む自己中心的な考え方がみえる。

主質問項目ではないが、#1.91 ‘調査への再協力の意向’の回答についても‘答える’という意向は‘信仰あり’群に多く、‘答えたくないほう’の回答は‘信仰なし・心大切でない’群に多く、上述と同様の傾向を示している。

まとめれば、‘信仰あり’群は人間関係も社会に対しても「あの世」についても道徳的で肯

表5. 〈信仰の有無×宗教的な心〉と関連のある質問項目と回答(第12次(2008年)調査)。

	Total 実数 %	〈信仰の有無×宗教的な心〉				〈信仰の有無×宗教的な心〉各層の回答割合の 年齢調整割合との差 (%)			
		層1 信仰あり	層2 信仰なし 心大切	層3 信仰なし 心大切で ない	層4 信仰なし その他	信仰あり	信仰なし 心大切	信仰なし 心大切で ない	信仰なし その他
#4.10 他人の子供 を養子にするか	368 21 987 57 289 17	30 20 48 62 17 15	17 13 61 55 18 21	13 15 55 42 21 21	7.2 ++ -9.7 ++ 1.8	-1.3 4.1 + -1.6	-3.2 5.2 -0.5	-7.4 + -0.8 2.3	
#4.5 子供に「金は 大切」と教える	527 30 849 49 336 19	35 28 44 54 20 17	34 34 58 50 17 16	23 23 42 42 31 31	0.7 -1.5 1.2	-2.0 4.7 + -2.5	6.2 + -2.5 -3.2	-3.8 -10.4 + 11.6 ++	
#2.1 しきたりに従うか	367 21 634 37 699 40	22 22 36 39 40 38	22 24 39 42 38 33	15 15 21 21 61 61	0.4 -2.4 1.8	0.7 1.8 -2.0	2.2 8.0 + -9.3 ++	-6.8 + -13.4 ++ 17.8 ++	
#8.1B 政治家にまか かせるか	409 24 1199 69	24 22 69 72	22 29 72 68	29 21 62 62	-0.3 1.1	-1.7 2.2	6.1 + -2.1	-2.3 -7.9 +	
#2.7 一番大切なもの	322 19 102 6 800 46 9 1 57 3 299 17 43 2 20 1	23 6 6 5 39 51 1 0 3 2 20 17 2 2 1 1	18 16 5 9 16 42 0 0 7 3 16 16 3 2 0 3	16 14 6 6 50 50 0 0 3 3 16 16 2 2 3 3	2.2 -0.2 -5.2 + 0.9 + -0.9 3.0 0.1 0.3	-0.6 -1.0 4.6 + -0.4 -1.0 -0.5 -0.3	-0.3 2.8 + -4.8 -0.1 3.9 ++ -2.0 0.5 -0.8	-2.7 -0.1 2.4 -0.4 0.1 -2.3 -0.8 1.4	
#4.11 先祖を尊ぶか	1099 64 440 25 179 10	82 14 26 31 4 8	66 26 31 42 8 24	44 31 42 28 14 14	14.5 ++ -9.8 ++ -4.4 ++	1.8 0.8 -2.6 +	-15.7 ++ 3.9 12.2 ++	-16.8 ++ 14.2 ++ 1.3	
#2.12 他人のためか 自分のためか	620 36 890 51	38 49 39 52	39 31 28 28	27 27 48 47	1.6 -1.9	2.9 -0.1	-4.6 6.0 +	-7.6 + -4.3	
#2.12C 人は信頼 できるか	522 30 1100 64	34 60 34 61	34 61 21 75	22 65	4.5 + -4.3 +	3.3 + -2.7	-9.3 ++ 12.2 ++	-8.6 + 1.6	
#9.6 日本人・西洋人 の優劣	641 37 159 9 478 28 372 22	39 9 9 8 27 26 21 21	41 13 8 13 30 31 21 20	23 8 8 8 31 28 21 20	-0.3 1.0 0.9 -0.4	3.8 + -1.1 -1.0 -0.6	-1.6 2.8 0.7 -1.8	-11.2 ++ -2.5 0.6 5.9 +	
#3.5 「あの世」を 信じるか	657 38 395 23 564 33	48 23 33 23	39 23 31 18	31 24 28 28	11.3 ++ -0.2 -11.2 ++	0.9 0.5 0.2	-8.9 ++ -4.7 + 15.8 ++	-16.3 ++ 5.8 + 1.5	
#5.1 悪人がキトク のとき	740 43 871 50	46 47 50 54	40 44 52 41	44 44	3.3 -2.5	-2.4 3.6 +	-0.1 1.2	1.3 -9.6 +	
#5.1B 親がキトク のとき	798 46 830 48	50 45 46 52	43 47 49 40	45 40	3.3 -2.2	-2.5 3.5 +	2.1 -0.4	-1.5 -7.5 +	
#2.5 自然と人間との 関係	879 51 664 38 86 5	56 32 49 42	47 39 47 37	50 37 2 2	5.9 + -5.0 + -1.4	-1.6 3.7 + -0.6	-4.1 0.2 5.0 ++	-1.6 -2.4 -2.4	
#7.4 日本と個人の 幸福	472 27 490 28 699 40	27 29 30 27	30 32 27 26	21 26 43 43	0.1 -1.1 0.8	2.2 -1.2 0.3	-0.8 5.2 + -3.0	-7.4 + -0.9 1.5	
#2.4 暮らし方	256 15 58 3 672 39 462 27 94 5 87 5	12 3 3 3 35 41 26 27 8 4 9 4	15 5 3 5 41 40 27 26 5 5 4 3	15 5 5 5 38 38 28 28 5 5 2 2	-2.4 0.0 -2.6 -0.8 2.1 3.5 ++	0.3 -0.5 2.1 0.1 -1.1 -0.7	3.3 0.8 -0.1 -0.1 -0.4 -1.5	-0.3 0.7 -1.9 1.6 -0.3 -3.3 +	
#4.16 子供の将来の 性質・礼儀正しさ	809 47 880 51	49 49	43 55	52 46	3.4 -2.5	-3.2 3.7 +	3.9 -4.6	-2.1 -1.2	
#4.16.4 子供の将来 他人を思いやる心	1268 73 421 24	75 24	75 23	70 27	3.4 -2.5	1.8 -1.2	-5.7 + 5.0 +	-6.3 + 3.0	
#4.16.7 子供の将来 人前で意見を言う力	434 25 1255 73	23 76	25 74	30 67	-2.5 3.4	-0.3 0.9	5.1 + -5.8 +	-0.7 -2.5	
#5.22 金か人間の つながりか	354 20 1312 76	18 79	20 77	27 71	-4.0 + 5.0 +	-0.9 1.3	8.0 ++ -6.9 +	0.4 -6.1 +	
#2.10 幸福かために なることか	596 34 1088 63	25 72	33 65	48 50	-7.0 ++ 6.7 ++	-0.7 1.3	11.0 ++ -10.5 ++	2.2 -4.8	
#5.6 めんどろをみる 課長	262 15 1403 81	12 84	15 82	15 77	-2.3 2.6	-0.2 0.6	5.0 + -3.3	-1.4 -3.3	
#7.24 就職の第1の 条件	127 7 320 19 505 29 752 43	7 18 18 26 48 46	6 18 10 29 10 34	9 23 9 30 9 34	-0.1 -1.4 -2.9 4.8 +	-1.1 -0.3 -0.1 1.8	2.3 -0.7 4.3 -5.7 +	0.7 5.5 + 0.7 -9.4 +	

表 5. (続き)

#8.6 選挙への関心	1. なにをいっても投票	697	40	52	41	26	30	7.6 ++	0.6	-9.6 ++	-5.6
	2. なるべく投票	827	48	40	49	55	51	-5.5 +	1.5	4.5	0.3
	3. あまり投票する気にならない	103	6	4	5	9	11	-1.6	-0.9	2.3	3.6 +
	4. ほとんど投票しない	93	5	4	4	9	8	-0.5	-0.9	2.2	1.2
#7.36 科学上の発見・利用は生活に役立つか	1. 役立っている	676	39	45	42	30	29	6.5 +	2.6	-9.3 ++	-10.6 ++
	2. 少しは役立っている	819	47	42	47	52	53	-5.0 +	-0.2	4.5	5.7
	3. 役立っていない	144	8	6	7	14	9	-2.3	-1.3	6.1 ++	0.8
#7.35 環境の保護は重要か	1. 非常に重要である	755	44	50	46	32	39	5.5 +	2.1	-11.1 ++	-3.8
	2. 重要である	839	49	45	48	53	52	-2.7	-0.4	3.4	2.6
	3. あまり重要ではない	101	6	4	5	13	5	-1.9	-1.4	7.0 ++	-1.2
	4. 重要ではない	7	0	0	0	1	0	0.1	-0.3	0.9 +	-0.5
#9.1.2 日本人の性格・勤勉	1. 選択あり	1154	67	69	72	56	58	2.9	4.5 +	-10.1 ++	-8.4 +
	2. 選択なし	529	31	28	26	40	38	-2.5	-3.7 +	9.0 ++	6.3
#9.1.A 日本人の性格・理想を求める	1. 選択あり	353	20	23	18	19	23	3.8 +	-1.8	-2.3	1.3
	2. 選択なし	1330	77	74	80	77	72	-3.4	2.5	1.2	-3.4
#5.1D1XD2 大切な道徳の組み合わせ	1. 孝行 & 恩返し	736	43	44	41	42	45	1.7	-1.1	-1.0	1.7
	2. 孝行 & 権利	242	14	14	14	13	15	-0.2	0.5	-1.5	0.8
	3. 孝行 & 自由	323	19	18	20	17	18	-0.4	1.0	-1.6	-0.5
	4. 恩返し & 権利	93	5	7	5	5	2	1.6	0.0	-0.2	-3.4 +
	5. 恩返し & 自由	156	9	9	9	8	9	-0.1	0.1	-0.3	0.3
	6. 権利 & 自由	131	8	5	8	12	7	-2.9 +	0.5	4.0 +	-1.2
	7. 孝行 or 恩返の一つだけ	19	1	2	1	1	1	0.5	-0.3	0.0	0.1
	8. 権利 or 自由の一つだけ	13	1	1	1	2	0	0.0	-0.3	1.0 +	-0.6
#5.1C1XC2 入社試験・親戚×恩人	1. 1番・恩人	378	22	25	23	18	16	3.0	0.7	-3.0	-5.1
	2. 親戚・恩人	228	13	12	12	17	14	-1.5	-0.9	3.9 +	0.9
	3. 親戚・1番	46	3	3	3	2	3	-0.1	0.3	-0.6	0.0
	4. 1番・1番	951	55	51	57	56	54	-2.4	2.4	-0.2	-2.9
#1.6 地方別	1. 北海道	91	5	5	6	4	7	0.5	0.4	-2.2	0.7
	2. 東北	149	9	7	9	9	10	-1.5	0.1	1.0	1.6
	3. 関東	489	28	22	29	35	31	-5.5 +	0.6	6.1 +	1.3
	4. 中部(東)	148	9	8	9	9	8	-0.6	0.3	0.4	-0.4
	5. 中部(西)	177	10	13	8	13	6	2.7	-2.2 +	3.5 +	-3.8
	6. 近畿	292	17	17	19	12	18	-0.1	1.6	-4.6 +	1.3
	7. 中国	107	6	8	6	4	6	1.5	0.0	-1.8	-0.5
	8. 四国	59	3	4	4	3	2	0.9	0.3	-0.9	-2.0
	9. 九州	217	13	15	11	11	14	2.1	-1.2	-1.5	1.8
#8.7J 支持政党	1. 自民党	388	22	30	20	22	15	4.7 +	-2.6	2.0	-4.5
	2. 民主党	227	13	13	15	11	9	-0.7	1.6	-1.0	-2.9
	3. 公明党	59	3	11	0	1	2	7.1 ++	-3.2 ++	-2.5 +	-1.1
	4. 共産党	30	2	2	2	2	1	0.1	0.0	0.2	-0.4
	5. 社民党	11	1	0	1	0	2	-0.8	0.4	-0.5	1.0 +
	6. 支持政党なし	928	54	39	59	60	61	-10.8 ++	5.3 ++	2.3	2.1
	7. 小学	31	2	3	1	1	3	0.6	-0.7	-0.5	1.9 +
	8. 中学	285	16	22	15	17	10	1.2	-2.0	4.1 +	-1.8
#1.3 学 歴	3. 高校	836	48	47	47	53	50	-1.6	-1.8	5.4	2.1
	4. 大学	574	33	28	37	29	37	0.0	4.4 +	-9.2 ++	-2.6
#1.9I 再協力の意向	1. 必ず答える	324	19	23	19	15	14	3.5	0.1	-3.3	-3.8
	2. なるべく答える	829	48	50	50	44	42	4.2	2.0	-6.0 +	-8.3 +
	3. あまり答えたくない	374	22	17	21	27	26	-5.2 +	-0.5	6.1 +	4.8
	4. 答えたくない	155	9	8	8	10	11	-2.4	-0.4	2.6	3.3

定的、「信仰なし・心大切」群はあまり特徴的ではないものの「信仰あり」群と似て現状肯定的、「信仰なし・心大切でない」群は自己中心的な考えが特徴として捉えられる。また、「信仰なし」の中で「宗教的な心大切」と「宗教的な心大切でない」との間で、生活の意識の違いが大きい。すなわち、日本においては、信仰のありなしよりも、宗教的な心を大切と思うか思わないか、が、西欧における信仰のありなしと同じような働きをしていると言えそうである。

「信仰あり」と「信仰なし」間の一般生活社会の質問への回答傾向の差については、「七か国調査」において、各国の属性の意味として論じられている(Hayashi and Suzuki, 1995; 統計数理研究所国民性国際調査委員会, 1998)。「宗教的な心」という考え方そのものが、日本の特徴としてあげられるのであるが、「信仰あり」だけでなく「宗教的な心大切」という宗教を否定はしない群は、一般生活社会における態度の面で、西欧のキリスト教の信仰者とそうでない群の

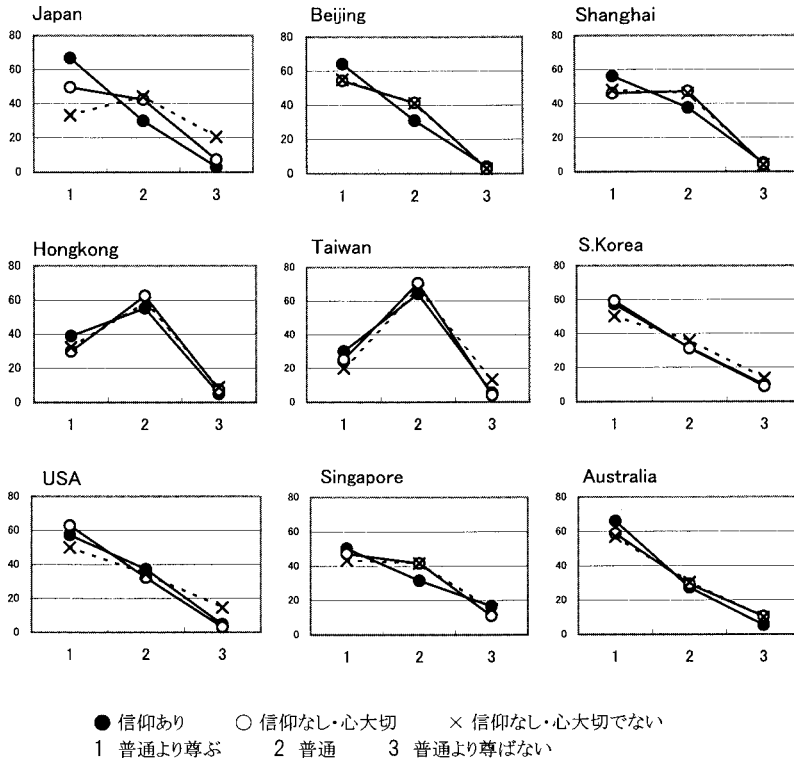


図5. 〈信仰の有無 × 宗教的な心〉と#4.11 ‘先祖を尊ぶか’の関連(「環太平洋価値観調査」).

間の差異と似た傾向を示すことが示された。

しかし、いくつかの面で、日本の特徴とみられるものがある。宗教関係の質問領域 §3 には入っていないが、#4.11 ‘先祖を尊ぶか’は、表5で示したように、第12次(2008年)調査で、〈信仰の有無 × 宗教的な心〉と関連が大変強く、‘信仰あり’群では67%が先祖を‘普通より尊ぶ方’と回答し、‘普通より尊ばない方’は3%であるのに対して、‘信仰なし・宗教的な心大切でない’群では、‘普通より尊ぶ方’は33%、‘普通より尊ばない’は21%である。ともに年齢との相関が高いが、年齢との関係を含めた社会全体の傾向として捉えたい。この信仰と先祖を尊ぶこととの関係は、「七か国調査」(1987年–1993年)によって、日本以外ではそれほど強い関係のないことがわかっている。また、「東アジア価値観調査」(2002年–2005年)と「環太平洋価値観調査」(2005年–2009年)により、1990年前後の「七か国調査」の欧米6カ国の方が、まだ多少の関連があり、東アジア諸国の中ではシンガポールが欧米と同程度である以外は、ほとんど無関係であることが示された(林・小谷, 2008; Hayashi and Nikaido, 2009)。例えば、韓国では‘普通より尊ぶ’は‘信仰あり’群で57%、‘信仰なし・心大切でない’群でも50%であり、‘普通より尊ばない’はそれぞれ10%と14%という差しかない。

図5に「環太平洋価値観調査」における〈信仰の有無 × 宗教的な心〉各群の‘先祖を尊ぶか’の回答分布を示した。「七か国調査」における同じ回答分布は、林(2006)にある。「日本人の国民性調査」と、「東アジア価値観調査」、「環太平洋価値観調査」の日本調査では、回答の割合そのものは異なるが、〈信仰の有無 × 宗教的な心〉各群の間の差の様相は全く同じである。



つまり、宗教や信仰が先祖を尊ぶことと関連しているのは、これまで調査を行った国・地域にはみられない日本の特徴といえることができる。さらに、日本における信仰の大多数を占める仏教が、日本人によってどのように受けとめられているかを示していると思われる。

## 8. まとめ

〈信仰の有無〉と〈宗教的な心〉との関係を国際比較でみると、〈宗教的な心〉という考え方が日本の特徴であり、1980年代までは、宗教的な心を大切と思う考えを含めると、年齢分布の変化の影響もあって、その割合はほとんど変化していなかった。‘宗教的な心大切’という考えが、加齢とともに信仰を持つようになることを支えてきたといえる。しかし、年齢層別にみると信仰を持つ人は少しずつ減少し、また、日本の特徴とされてきた、「信仰はなくても宗教的な心を大切と思う」人も減少している。‘宗教的な心大切’の減少は信仰の減少につながっていると考えられる。しかし一方、‘あの世を信じる’という考えは、1953年と比べて、2008年には増加しており、また若い年齢層では高年齢層よりも信じる人が多い。最近の「環太平洋価値観調査」によれば、「霊魂」「死後の世界」についても、若い年齢層の方が‘ある’あるいは‘あるかもしれない’と回答している。「宗教」「信仰」「宗教的な心」という言葉への反応は減少の傾向であっても、「あの世」「死後の世界」「霊魂」などへの関心はむしろ増加していることは、死の恐れ、自然の神秘への尊敬、人の力の及ばない何かに対する畏敬の念、などは、現在の社会でも無くなっていないことを示している。しかし、現代人は既存の宗教にも、「宗教的な心」という言葉で共有できていたものにも、頼ることができなくなっている。ましてや宗教団体に対する信頼感は大変低い。例えば、「東アジア価値観調査」の日本調査(2002年)の信頼感の質問では「宗教団体」に対する信頼感をみると4選択肢の「あまり信頼しない+全く信頼しない」が80%である。こうした中で、信仰や宗教的な心に代るものとしてスピリチュアルケアなどが流行したのだろう。

現代日本人の宗教に関する意識を第12次(2008年)調査で総合的に観察し、信仰は社会・生活上ポジティブな考え方の中にあり、宗教的な心は大切とする考え方もこれに大変近いことが示された。宗教的な心は大切でないとする考えは、社会に対してネガティブな考えと強く結び付いており、20代・30代前半の男性層もこの近くに布置する。また、それぞれの質問の回答の、信仰の有無と宗教的な心との関係を、年齢の影響を除く形で比較したが、そこでみられた差からも、宗教的な心は大切であるという考え方は、信仰を持つ意味と似ていることが読み取れる。このことは、日本では西欧に比べて‘信仰あり’の割合は低いが、‘宗教的な心大切’という考えが西欧の‘信仰あり’に質量ともに匹敵することを表していると考えられることができる。

そうした構造を持ちながら、信仰を持つものの減少は今後も続くのであろうか。加齢とともに信仰に向かう土台となっていた、宗教的な心は大切であるという考え方が、若い層で減少していることは、確かに今後も信仰を持つものは減少することを予想させる。しかし一方「あの世」や霊の存在などを信じるものはむしろ増える傾向があり、それらは宗教と結びつくことも考えられるものの、今の社会における既存の宗教や、これまで宗教的な心とされてきたものとは多少違う形で捉えられているのであろう。

以上、「日本人の国民性調査」で、「信仰を持っているか」という質問とともに‘宗教的な心を大切と思うか’の質問が継続され、また初期の調査で尋ねられた‘あの世を信じるか’が再び2008年調査で取り上げられたことによって、他の様々な調査結果との比較を通して、みえてきたことである。

## 注.

- 1) 同じ質問を継続する意味の重要性が認識されたのは第2次調査の後であり、「最初から継続質問を重視しなかったのは残念だ」(林知己夫談)ということである。
- 2) 質問項目の質問内容を表す固有の言葉として、「日本人の国民性調査」については、中村他(2009)の調査項目一覧表に各項目の項目番号とともに「見出し」として示されている。国際比較研究ではニックネームと称しているため、本稿ではより一般的にニックネームと称した。特に「日本人の国民性調査」の項目見出しについては、慣例に従いシングルクオートで囲んで「……」のように表した。
- 3) 調査計画サンプルの年齢分布は、母集団たる住民票記載の成人全体の年齢分布とほぼ一致しているが、有効サンプルは偏りがある。ここに示したのは有効サンプルについての論議であり、特に年齢層別による回収率の違いが成人人口の年齢分布より高齢に偏る傾向は近年ほど大きくなっているため、回収率による修正をさらに加えるなら、これ以上に差は大きくなると予想される。
- 4) 本稿に用いた主な国際比較調査は次のとおりで、著者は共同研究者として分析に参加した。「国民性七か国比較調査」(「七か国調査」): ドイツ(旧西ドイツ)調査(1987年), フランス調査(1987年), イギリス調査(1987年), アメリカ調査(1988年), 日本調査(1988年), イタリア調査(1992年), オランダ調査(1993年)  
「東アジア価値観調査」: 中国(北京・上海・香港)調査(2002-2003年), 台湾調査(2003年), 韓国調査(2003年), シンガポール調査(2004年), 日本A・B調査(2004年)  
「環太平洋価値観調査」: 日本A・B調査(2004年), 中国(北京・上海・香港)調査(2005年), 台湾調査(2006年), 韓国調査(2006年), アメリカ調査(2006年), シンガポール調査(2007年), オーストラリア調査(2007年), インド調査(2008年)
- 5) 「日本人の国民性調査」では、回答選択肢は「信じる」「どちらともきめかねる」「信じてはいない」となっているが、回答選択肢リストを用いてはいないので、回答選択肢の言葉は厳密ではない。2004年の「環太平洋価値観調査」の日本調査は同じく面接調査であるが、質問文も選択肢も異なり、回答選択肢リストが用いられているなどの違いがあり、回答割合レベルは異なるものの、読み取れる傾向は同じである。日本以外の環太平洋諸国・地域において、年齢の低いほうが死後の世界「あると思う」という傾向は日本だけではないが、それぞれの国における諸相を検討する必要がある。
- 6)  $q_{ij} = \sum_k r_{ik} \times s_{jk}$ , ただし,  $r_{ik}$  は第  $i$  選択肢の年齢第  $k$  層における回答割合,  $s_{jk}$  は〈信仰の有無 × 宗教的な心〉第  $j$  群における年齢第  $k$  層の割合。
- 7) 「家・先祖」は回答数そのものが少ないため、割合の差は小さいが、明らかな有意差がある。

## 謝 辞

「日本人の国民性調査」のメンバーとして宗教についての分析をまとめることを勧めて下さった統計数理研究所国民性調査委員会の方々に御礼を申し上げます。また、拙い文章や不十分な分析について、厳しくも暖かくまた根気強くご指導いただきました査読者の方々に、心から御礼申し上げます。また、国民性国際調査委員会の皆様にも暖かいご指導と励ましをいただき、感謝を申し上げます。

## 参 考 文 献

- 電通総研・日本リサーチセンター 編(2008). 『世界主要国価値観データブック』, 同友館, 東京.
- 林 知己夫(1979). 戦後日本人の意識はどう変わったか—『伝統保守』へのUターンと“新型日本人”の出現, 朝日ジャーナル, **21**(32), 96-100.
- 林 知己夫 編(1979). ノンパラメトリック多次元尺度解析についての統計的接近, 統計数理研究所研究レポート, No. 44.
- 林 知己夫 他(1991). 意識の国際比較方法論の研究—新しい統計的社会調査法の確立とその展開—, 統計数理研究所研究レポート, No. 71.
- 林 知己夫, 林 文(1995). 国民性の国際比較, 統計数理, **43**(1), 27-80.
- 林 文(2006). 宗教と素朴な宗教的感情, 行動計量学, **33**(1), 13-24.
- 林 文, 小谷みどり(2008). 宗教的な心について—環太平洋価値観調査から—, 日本行動計量学会第36回大会抄録集, 69-70.
- Hayashi, F. and Nikaido, K. (2009). Religious faith and religious feelings in Japan: Analyses of cross-cultural and longitudinal surveys, *Behaviormetrika*, **36**(2), 167-180.
- Hayashi, F. and Suzuki, T. (1995). Data analytic representation of characteristics of various breakdowns on cross-cultural survey, *Data Science and Its Applications* (eds. Y. Escoufier, C. Hayashi, etc.), 235-246, Academic Press, Tokyo.
- 中村 隆(2005). コホート分析における交互作用効果モデル再考, 統計数理, **53**(1), 103-132.
- 中村 隆 他(2009). 国民性の研究 第12次全国調査—2008年全国調査—, 統計数理研究所研究レポート, No. 99.
- NHK放送文化研究所 編(2010). 『現代日本人の意識構造 [第七版]』, NHK ブックス, 東京.
- 鈴木達三 他(1995). 意識の国際比較における連鎖的調査分析方法の実用化に関する研究—総合報告書—, 統計数理研究所研究レポート, No. 76.
- 鄭 躍軍 編著(2005). 日本・中国の国民性比較のための基礎研究—中国杭州市・昆明市における意識調査—, 研究レポート, No. 1, 総合地球環境学研究所, 京都.
- 統計数理研究所国民性調査委員会(1961). 『日本人の国民性』, 至誠堂, 東京.
- 統計数理研究所国民性調査委員会(1970). 『第2日本人の国民性』, 至誠堂, 東京.
- 統計数理研究所国民性調査委員会(1975). 『第3日本人の国民性』, 至誠堂, 東京.
- 統計数理研究所国民性調査委員会(1982). 『第4日本人の国民性』, 出光書店, 東京.
- 統計数理研究所国民性調査委員会(1992). 『第5日本人の国民性, 戦後昭和期総集』, 出光書店, 東京.
- 統計数理研究所国民性国際調査委員会(1998). 『国民性七か国比較』, 出光書店, 東京.
- 吉野諒三 編(2004a). 東アジア価値観国際比較調査—『信頼感』の統計科学的解析—2002年日本調査報告書, 統計数理研究所研究レポート, No. 91.
- 吉野諒三 編(2004b). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2002年度中国 [北京・上海・香港] 調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2005a). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2004年韓国調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2005b). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2004年台湾調査調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2005c). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2004年シンガポール調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2005d). 東アジア価値観国際比較調査—2004年度日本A調査報告書—, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2006a). 東アジア価値観国際比較調査—『信頼感』の統計科学的解析—, 平成14-17年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書.
- 吉野諒三 編(2006b). 環太平洋(アジア太平洋地域)価値観国際比較調査2005年度中国(北京・上海・

- 香港)調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2007a). 『東アジア国民性比較 データの科学』, 勉誠出版, 東京.
- 吉野諒三 編(2007b). 環太平洋(アジア太平洋地域)価値観国際比較調査 2006 年度韓国調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2007c). 環太平洋(アジア太平洋地域)価値観国際比較調査 2006 年度 USA 調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2008). 環太平洋(アジア太平洋地域)価値観国際比較調査 2007 年度シンガポール調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三 編(2009). 環太平洋(アジア太平洋地域)価値観国際比較調査 2008 年度インド調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三, 裴岩 晶 編(2007). 環太平洋(アジア太平洋地域)価値観国際比較調査 2006 年度台湾調査報告書, 統計数理研究所, 東京.
- 吉野諒三, 松本 渉 編(2008). 環太平洋(アジア太平洋地域)価値観国際比較調査 2007 年度オーストラリア調査報告書, 統計数理研究所, 東京.

## Contemporary Japanese Religious Mind—Based on Survey Data from the Japanese National Character and Other Cross-national Surveys

Fumi Hayashi

Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

This paper investigates contemporary Japanese attitudes toward religion by tracing changes in response patterns to questions relating to religion included in various installments of the Japanese National Character Surveys from 1953 to 2008. It also compares these findings to the results of a number of other international comparative surveys. A cohort analysis reveals that the increase in religiosity of the Japanese stems mainly from age effect. To visualize the relationship between religiosity and the importance of the “religious mind” in a broader sense in contemporary Japanese societies, the Quantification III method, incorporating nearly all questions included in the 12<sup>th</sup> installment of the National Character Survey, was employed. This resulted in a 2-dimensional configuration that displays structural patterns in people’s minds. Among other things, this effort demonstrated that while both religiosity and the importance of the religious mind are associated with positive attitudes toward society in general, a view holding that the “religious mind is unimportant” is associated with more negative attitudes toward society. Relationships between religiosity and the importance of the religious mind with other general social attitudes and orientations were also discussed, based on comparisons of results of these analyses after adjusting for differences in the distribution of respondents by age.